



# 英文法を再構築する

田中茂範

PEN 言語教育サービス代表

## ● 文法の全体像を示す

「従来の文法で何が問題か」と問われれば、筆者は、「全体像の欠如」問題を挙げます。個々の文法項目の説明は行われものの、項目が有機的に関連しあった文法の全体像が示されていないがために、知識がバラバラになり、実際の運用能力にはつながりにくいという問題です。

文科省の指導要領（外国語）には、「英語の特質を理解させるために、関連のある文法事項はまとまりをもって整理するなど、効果的な指導ができるよう工夫すること」とあります。これは重要な視点です。指導要領で指摘する「まとまり」は部分的な集合ですが、以下、われわれは、ここで示唆されている方向性をさらに進め、筆者らが考える表現英文法の全体像について述べていきます。

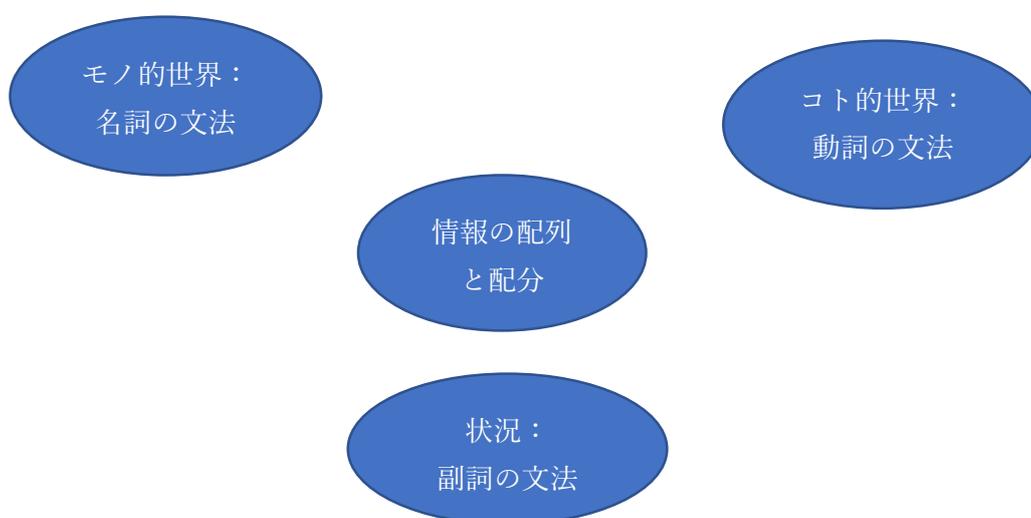
## ● 表現英文法の世界

私たちが世界を英語で語るための文法のことを「表現英文法」と呼びます。ここでいう「世界」には私たちの外の外的世界と私たちの内の内的世界が含まれます。日常の出来事や世界の出来事は外的世界での事柄ですが、感情的反応をするだとか評価を行うなどは内的世界に関わる事柄です。

ここで提案する表現英文法は、比喩的に言えば、**3つの島とそれをつなぐ1つの経路で構成**

される世界です。3つの島とは、モノ的世界を語る名詞の英文法、モノとモノを関係づけて出来事や状態、すなわちコト的世界を語る動詞の英文法、そして、コトを取り巻く状況的世界を語る副詞の英文法の3つ文法指します。この3つの文法を使って名詞チャンク、動詞チャンク、副詞チャンクを作るわけです。なお、ここでいうチャンクは句や節に相当し、言語表現の単位のことをいいます。そして、この3つの島の資源を有効利用することで、表現活動が行われるのです。

しかし、資源を有効利用するための経路(チャンネル)が必要で、それは、ここでは「情報の配列と構文」として扱います。これをイメージとして捉えれば以下ようになります。



## ● 名詞の文法

まず、モノの集合 (things) としての世界を想定することができます。モノの要素はいろいろありますが、それは名詞を中心に展開する世界ということで、名詞的世界と呼ぶことができます。英語では、名詞的世界をどういう文法で記述するのか、これが名詞的世界を語る文法の骨子となるわけです。名詞の文法の道具立てを示すと以下のリストになります。

### ・名詞形：

a + 名詞、0 + 名詞、名詞の複数形、the + 名詞、the + 名詞の複数形

### ・数量詞：

one, two, first, second, every, each, some, most, all, no, none, few, a little, a few, a little, several, …

### ・限定詞：

a, the, 0, my, his, some, no, …

・限定詞+形容詞+名詞：

形容詞を並べる順序：主観的・心理的+客観的・知覚的+属性・用途+名詞

・後置修飾：

前置詞句

形容詞句

副詞句

同格（名詞句）

関係節：which / that /who / whom / whose

・名詞を修飾する動詞的要素：

doing：現在分詞

to do：to 不定詞

done：過去分詞

・代名詞：

it, one, some, all, …

・指示詞：

this, that, these, those

・動詞の名詞化：

動名詞

・名詞節：

that 節、wh 節

英語では、まずどの名詞形を使うかが肝心です。名詞形は「a(n) + 名詞」「0 + 名詞」「名詞の複数形」「the + 名詞」「the + 名詞の複数形」の5つがあります。この5つを状況に合った形で選択することでモノを表現します。an egg と egg は違う名詞形で、以下のように指す対象も異なります。

an egg



egg



ドレスに卵（の黄身）が付いている状況だと You got egg on your dress.となります。また、a piano だと「1台のピアノ」、そして piano だと例えば「ピアノ科」と対象が違ってきま

す。誰もが知っている楽器としてのピアノは the piano といいます。

モノの所有者が問題になる場合は、{my, your, our, his, her, their} といった所有代名詞を使います。my piano は「私のピアノ」で、a piano (あるピアノ) を「私のもの」として表現する方法です。

モノの数量が問題になる場合もあります。具体的な数を示すこともあります。数量が多いとか少ないかを表すには、数量詞が使われます。a few pianos だと「2, 3台のピアノ」といった意味合いで、数が少ないことを表します。several pianos になると「数台のピアノ」です。雨は rain で物質名詞なので、plenty of rain (たくさん雨) とか little rain (ほとんど降らない雨) のように名詞は単数形のままで使います。

モノの特徴も表現したい場合に活躍するのが形容詞です。an expensive piano は「高価なピアノ」で、a reasonably priced piano は「手ごろな値段のピアノ」ということです。評価に関する形容詞、見た目に関する形容詞、素材に関する形容詞など多彩な形容詞があり、それらをうまく活用することでどういうモノであるかを明らかにすることができます。

名詞の英文法では、核となる名詞情報に関する種々の情報を後から追加することが可能です。これを「後置修飾」といいます。前置詞句が代表的ですが、形容詞句、副詞句、さらには to 不定詞を使った後置修飾、現在分詞を使った後置修飾、関係節を使った後置修飾があります。an expensive piano in the living room で「居間にある高価なピアノ」ということで、in the living room が an expensive piano を後置修飾しています。後置修飾の仕組みを利用して、a piano too expensive to put in the living room (居間に置くには高価すぎるピアノ) だとか、a priceless piano produced by the Perzina brothers in the late 19<sup>th</sup> century (19世紀後半にペレツィーナ兄弟によって制作された価値がつかないほど高価なピアノ) のような表現が可能となります。同格も、ある意味で、先行する名詞情報を説明するという働きがあることから、後置修飾のひとつに加えることができます。

The word *piano* is a shortened form of *pianoforte*, the Italian word for the instrument. 「ピアノ」という語は「ピアノフォルテ」、すなわちその楽器を表すイタリア語の短縮形だ。

a shortened form of pianoforte, the Italian word for the instrument は同格表現の例です。もちろん、関係節を使って後置修飾すると表現の可能性が大きく広がります。

The **piano** is a musical instrument that is designed to be played by means of a keyboard. ピアノはキーボードを手段に演奏されるように作られた楽器だ。

名詞の英文法には、動詞句や節を名詞情報として扱う操作も含まれます。動詞を名詞化することで動名詞として扱うことができます。「ピアノを弾くのがぼくの気晴らしだ」だと Playing the piano is my pastime. といいます。I love playing Beethoven's Piano Sonata No. 14, popularly known as Moonlight Sonata. は「私はベートーベンの『月光』と一般に呼ばれる、ピアノソナタ 14 番を弾くのが好きだ」という意味です。このように、主語や動詞の目的語や前置詞の目的語として動名詞を使うことができます。

また、節内容を「～であること」として示すには that を使って名詞節を作るとか、「～かということ」として示すには who、what、when などの wh 語を使って名詞節を作ります。

- ✓ I must confess that I'm not prepared to play that sonata. 告白すると、ぼくはそのソナタ曲を弾く準備ができていないんだ。
- ✓ I'm wondering who will play Moonlight Sonata in the concert. コンサートでは誰が月光を弾くのかしら。

もうひとつ名詞の英文法には、名詞情報を代名詞で表現したり、対象を名詞で表現するのではなく、「これ」「あれ」「それ」として直接指している this や that で表現することも含まれます。

ある「演奏」を指して

- ✓ This is a beautiful piece of work. これは素晴らしい作品だ。
- ✓ That was mediocre, I would say. あれはまあ月並みだったな。

a tall woman を she で表現したり、何かの対象を際して Look at that. という場合も同様です。

## ● 動詞の文法

次に動詞の文法を構成する道具をリスト形式で並べると以下ようになります。

### ・動詞の文法の道具立て

テンス {助動詞+完了+進行+受動態} + 動詞 +  $\alpha$

テンス、アスペクトと時間の関係：

| 過去    | 現在    | 未来       |
|-------|-------|----------|
| 過去単純形 | 現在単純形 | 助動詞＋原形など |
| 過去進行形 | 現在進行形 | 助動詞＋進行形  |
| 過去完了形 | 現在完了形 | 助動詞＋完了形  |

#### ・動詞のタイプ

他動詞・自動詞  
 使役動詞  
 見え方動詞 (seem, look, appear)  
 知覚・感覚動詞  
 現在分詞・過去分詞  
 to 不定詞・原形

#### ・助動詞

分詞補完型 : be doing / be done, have done  
 機能付加型 : do  
 態度表明型 : can (will, must, may, shall, would, should, might, could) do; can (will, must, may, shall, would, should, might, could) have done  
 助動詞関連表現 : be able to, be going to, used to, have to …

#### ・形容詞の叙述用法

形容詞構文  
 感情形容詞＋前置詞  
 形容詞＋that /wh 節

#### ・態

能動態  
 中間態  
 受動態

#### ・動詞の共演情報：動詞＋ $\alpha$

動詞＋0 (自動詞)  
 動詞＋名詞 (形容詞、副詞、前置詞句、現在分詞、過去分詞)  
 動詞＋名詞＋名詞  
 動詞＋名詞＋形容詞 (副詞、前置詞句、現在分詞、過去分詞)  
 動詞＋to do / doing

動詞＋名詞＋to do

動詞＋that 節・wh 節

動詞＋名詞＋that 節・wh 節

動詞は英語のエンジンだといわれます。動詞はあるコト（事態）の中軸であり、動詞は、自動詞用法(例. A bird flies.)でない限り、共演情報(目的語、補語と一般に呼ばれる情報)を必要とします。この点については、上記の 5 文型批判で触れた通りです。

動詞の英文法の役割はそれだけではありません。何かを表現するということは、「話し手の今」の時点から行われるのが必然です。「今」は現在に含まれ、現在を語るということと、今から過去を回想して語るということは表現の上でも異なります。つまり、動詞のテンスが異なるということです。英語では現在と過去の 2 つのテンスがあり、それぞれ動詞の現在形と過去形になります。過去と現在には意識の上でも切れ目があり、過去のことは済んだこととして処理されます。しかし、未来を展望して語る際には、現在との切れ目はなく、いわば地続きの連続体です。そこで、未来のことはテンスとしては現在形を用います。

動詞の時間情報はテンスとして表現されますが、動詞がどういう様子を表現しているかも同時に考慮する必要があります。動きが感じられない様子か動きが感じられる様子か、完了した様子か未完了の様子かということです。これをアスペクトといいます。静止画的な単純アスペクト、動画的な進行アスペクト、完了状態を表す完了アスペクトの 3 つが基本です。

プロのピアニストなら、現在単純形を使って I play the piano. といっても自然です。What do you do? (ご職業は?) と聞かれて、I'm a pianist. I play the piano as a pro. (僕はピアニストです。プロとしてピアノを弾きます) と応じる場面が想像できますね。現在進行形を使って Horowitz is playing Carmen Fantasy now. といえば「ホロヴィッツは今カルメンファンタジーを演奏している」という意味になり、動画的に状況を描写することになります。過去単純形は過去の事実を述べる際に使われ、Horowitz received piano instruction from an early age. (ホロヴィッツは幼少の頃からピアノの指導を受けた) や On December 18, 1925, Horowitz made his first appearance outside his home country, in Berlin. (1925 年の 12 月 18 日に、ホロヴィッツ祖国から離れたベルリンで最初に登場した) などがその例です。過去完了形を使うと、He had played the piano for more than 60 years. (彼は 60 年以上もずっとピアノを弾いた) のような表現ができます。

動詞の構文は、動詞＋ $\alpha$ の $\alpha$ にどういう情報を入れるかに関するもので、いわゆる 5 文型の代替案になります。動詞の構文タイプは 8 つあります。それぞれを使うことで、以下のようさまざまな状況を表現することができます。

- ✓ The player kept playing the piano for 3 hours.
- ✓ We gave the player a big hand.

動詞の英文法では、さらに発話者の態度を表す法助動詞の使い方も含まれます。意志、予定、義務、推量、実現可能性などある内容についての話し手の態度が含まれます。オバマ大統領下の時期を想像してください。支援者たちは、President Obama makes a change. (オバマ大統領は変革を起こす)ということについて、自らの態度を加えて、次のように表現しましょう。

- ✓ President Obama can make a change. オバマ大統領は変革を起こすことができる。
- ✓ President Obama may make a change. オバマ大統領は変革を起こすかもしれない。  
President Obama must make a change. オバマ大統領は何としても変革を起こさなければならない。
- ✓ President Obama will make a change. (きっと) オバマ大統領は変革を起こすだろう。

語り方として態 (voice) の選択もあります。基本は能動態ですが、動作が及ぶ対象を主語にして語る受動態表現があります。「誰が何をした」という発想に対して「何かが誰かによって行われた」という発想の違いです。

- ✓ American citizens re-elected President Obama. アメリカ国民はオバマ大統領を再選した。
- ✓ President Obama was re-elected (by American citizens). オバマ大統領は (アメリカ国民に) 再選された。

さらに、動詞のタイプとして知覚・感覚動詞、使役動詞などについても動詞の文法の範囲内です。これによって以下のような表現が可能になります。

- ✓ I once heard Dizzy Gillespie playing the trumpet in a park of New York. かつてディジー・ガレスピーがニューヨークの公園でトランペットを演奏しているのを聞いたことがある。
- ✓ Charlie Parker let Gillespie use his bent trumpet. チャーリー・パーカーはガレスピーが曲がったトランペットを使いたいように使わせた。

このように、動詞の文法には、上記でリストしたような道具があり、それぞれを自在に使えるようにするのが動詞の文法力を高める方法だといえます。

## ● 副詞の文法

さて、副詞の文法がカバーするのは、副詞の機能と副詞の位置になります。副詞の機能については、以下のように、他の語句に強弱アクセントを付ける修飾機能と情報表示機能があります。このうち、情報表示機能は WHY, HOW, WHERE, WHEN などに関する副詞情報を示す働きをいいます。

### ・副詞の機能

他の語句に強弱のアクセントをつける修飾機能

情報表示機能：

話し手の態度を表す副詞的表現

時間・場所を表す

頻度、様態、手段・道具、付帯状況を表す

目的、結果、原因などを表す

### ・副詞の位置

文頭の副詞は状況設定

文尾の副詞は情報追加

文中での副詞は頻度や様態を表すものが多い

副詞チャンクの「修飾機能」とは、修飾される語句の意味に強弱濃淡のアクセントをつけるというものです。修飾の対象として多いのは、なんといっても形容詞です。例えば「つらい失恋」をした人は、それを a painful breakup と表現するでしょう。形容詞を増やして a painful and sad breakup といえば、失恋のひどさが強調されます。しかし、painful (つらい) ということそれ自体を強調したいという場合は、形容詞の追加だけでは十分ではありません。そこで登場するのが副詞です。強弱濃淡の調整をするためのよく使われる副詞的表現には、以下のものがあります。

**強く**：very、so、absolutely、perfectly、extremely、really、quite、such、truly、too、a lot、how、much、way、a whole lot、dead、enough

**どちらかといえば**：kind of、sort of、more or less、rather、fairly、somewhat、merely、a little too

**弱く (少し)**：a little、a little bit、slightly、not very

例文は以下の通です。

- ✓ It's going to be very hot today. 今日はとても暑くなるぞ。
- ✓ The situation is extremely serious. 状況は極めて深刻です。
- ✓ You're absolutely right. まったくおっしゃるとおりです。
- ✓ Don't make too much noise. うるさくしすぎないように。
- ✓ His story was a whole lot stranger than mine. 彼の話は私のものよりずっと不思議な内容だった。

例えば、It was a painful breakup. (それはつらい失恋だった) を It was a(n) very [extremely, unbelievably] painful breakup. (それはとても〔極めて、信じられないほど〕つらい失恋だった) と表現することで、painful の度合いを高めることができます。a slightly painful breakup だと「ややつらい失恋」ということであまりたいしたひどさではなくなります。a bit of a painful breakup になると、「ほんのちょっとつらい失恋」ということです。

情報表示機能においては、「どこで(に)」を表す場所情報を表すには前置詞や here、there、upstairs などの副詞が活躍します。「いつ」に関する時間情報についても同様で、前置詞と副詞が表現上の中心的役割を演じます。時間情報も重要で、何かを語る際にそれはいつのことなのかを示す必要があります。頻度情報も時間に関連した情報だといえます。

副詞の文法で「様態 (manner)」は大きな要素です。「キース・リチャードはギターを弾いた」という事実に対して「どのように」を加えて表現すると以下ようになります。

- ✓ Keith Richard played the guitar skillfully. キース・リチャードは技巧的にギターを弾いた。
- ✓ Keith Richard played the guitar in an unusual way. キース・リチャードはいつもとは違う感じでギターを弾いた。
- ✓ Keith Richard played the guitar in such a way as to touch the heart of the audience. キース・リチャードは聴衆の心に触れるようにギターを弾いた。

「どのように」というのが様態ですが、手段や道具も広義には様態に含めることができます。以下は手段の例です。

- ✓ You cannot maintain peace and global governance by power and money alone. Dialogue must be added as an effective means. 権力と金だけで平和とグローバル・ガバナンスは維持できない。対話が有効な手段として加えられるべきだ。
- ✓ You can learn the essence of dialogue by reading Martin Buber's "I and Thou." 対話の本質をマーティン・ブーバーの『我となんじ』を読むことで対話の本質を学ぶことがで

きる。

「どうして」に関する目的や原因なども英語で自由に表現する必要があります。目的や原因には結果が伴いますが、「結果として～になるように」という意味合いにおいて、結果を強調して目的を述べるということもあります。

副詞の文法では、副詞の位置とその意味的な働きも大切です。文頭に持ってくれば、何かの状況を設定するという働きが強くなり、文尾に持ってくれば補足的に情報を足すという働きが強くなります。文中に使われる副詞表現は比較的限られておりますが、何かを修飾するか、途中で情報を挿入するという働きになります。

## ● 情報の配列と構文

何かを英語で表現しようとする時、英語の流れ (flow) が重要になってきます。この流れを文法的にとらえるとどうなるのでしょうか。それは「チャンキングの文法」ということになります。つまり、情報単位としての句 (や節) といったチャンクの作り方と、情報の配列に関するチャンキングの両方が備わってはじめて表現のための英文法はできあがるということです。チャンク表現を連鎖として並べていくこと、これがチャンキングということです。チャンキングは語順、つまり、情報の配列の流れに従います。ここでは、情報の流れを「配列のテンプレート」としてとらえることができます。情報の配列において重要なはたらきをする接続詞あるいは情報連結詞です。

また、情報の配列には構文の型のようなものも含まれます。慣用化された英語の重要構文として、比較構文、否定構文、話法 (直接話法、間接話法)、仮定法構文が含まれます。そこで情報破裂と構文の文法に関する道具立てとして以下が含まれることとなります。

・ 語順：情報配列

・ 接続と論理

情報をつなぐ接続詞：and, but, so, or

時にかかわる接続詞：when, while, as, before, after, since, until, as soon as, …

分詞構文

理由・条件などを表す接続詞：because, since, now that, if, unless, as long as, although, though, even if, even though

・文のタイプ

平叙文      疑問文      感嘆文      倒置文      省略文

・比較構文

・否定構文

・話法

・仮定法構文

## ● 英文法力

以上のことを総合していえば、英文法力とは、名詞的世界、動詞的世界、副詞的世界について、どういう英語で、どれだけ、それぞれの世界、そして総合化された世界を語るができるか、ということになります。

例えば、名詞的世界を語るのに、子どもは比較的簡単な文法を使うことからはじめ、もちろん、個人差はありますが、徐々に機能性の高い洗練された文法を身につけていくと考えられます。同じことが、動詞的世界、副詞的世界についてもいえます。この3つの文法は世界を語る上で必要なものであり、例えば、小学生であっても、英語を学ぶ際に、たとえその規模は小さくても、モノの世界を語る名詞の文法、コトの世界を語る動詞の文法、そして、状況を語る副詞の文法を持っているはずです。文法力を高めるということは、これらの小さな文法を同心円状に拡張していくことだと考えることができます。

もちろん、世界はこれらの3つの世界を統合・融合したもので、それぞれが独立しているわけではありませんが、英文法書の編成原理としては、名詞的世界、動詞的世界、副詞的世界という切りわけ方は有効であると考えます。そして、英語の配列に沿って、チャンクを連鎖化させること、これが表現活動ということです。

## ● 文法指導の原理

文法がわからないから英語がわからない。これは多くの中高生の「悩み」です。実際、たいへん多くの生徒が比較級や不定詞や現在完了形といった文法項目で躓いています。「生徒が文法ができない」ということは、先生が文法を教え切れていないということでもあると思います。というのは、教えることと学ぶことは表裏一体だからです。

生徒にとってどうして文法がむずかしいかといえば、ひとつには覚えることが多くて覚えきれないということがあるでしょう。動詞の過去形や過去分詞形を覚えたり、形容詞や副詞の比較級や最上級の形を覚えたり、たしかに覚えることはたくさんあります。しかし、覚えるだけであれば、徹底的に練習すればほとんどの生徒が課題をクリアすることができるはずですが、むしろ、教え方次第で、「文法は簡単で、役立つもの」と生徒が感じるようになるはずですが。

## ● どう教えるか

文法はコトバを使う際の規則であり、どの文にも文法の血が流れているということを生徒に実感させることが大切です。そのためには、表現のために文法があるということ、文法を知ると表現力がアップするということをきちんと計画をたてて提示することが必要となります。その際に、考慮すべき原則のようなものがあると思います。

### 原則1：「形が違えば意味が違う」

文法問題の典型は、書き換え問題です。能動態文を受動態文に書き換える、2つの文を関係代名詞を使って1つの文に書き換える、第4文型を第3文型に書き換える、直接話法の文を間接話法の文に書き換える、等々です。しかし、書き換えることで形が変わり、それは自動的に意味の違いに反映されていることを教師は認識しておかなければなりません。「書き換え」それ自体が、問題なのではありません。書き換えは表現のレパートリーを広げることに繋がります。その際に、それぞれの形の表現上の特徴をきちんと押さえることが肝心です。

## ● 受動態表現の場合

例えば、能動態文を受動態文に書き換えるエクササイズにおいては、どちらの表現にするかで「視点」が変わるということを教える必要があります。生徒に以下のような内容を伝えるといいでしょう。（ちなみに、能動態と受動態の書き換えは他動詞に限られるので、自動詞と他動詞の表現方法も簡単に比べておくといいでしょう。）

解説：日本語でも英語でも、「人が何かに対して何かをする」という能動態と「何か人がよって何かをされる」という受動態があります。このふたつの表現方法の違いを理解するには、「視点」に注目することが大切です。

### ・他動詞

何かに対して何かをする（能動態）

何か人がよって何かをされる（受動態）

### ・自動詞

何か人がよってある状態になる（ある動作を行う）

能動態は、通常、「誰かが対象に対して何かをする」というとらえ方をします。一方、視点を対象において、「何か人がよって（誰かによつて）何かをされる」というとらえ方をするのが受動態の表現です。例えば「コンピュータが故障した」という状況で、次のような表現が可能です。

### ・コンピュータが故障した

(1) Bill has broken the computer.

(2) The computer has been broken (by someone).

(3) The computer has broken.

(1)は「誰か (Bill) がコンピュータを壊した」という表現で、行為者を中心にした語り方です。それに対して (2) と (3) は、「コンピュータ」が話題の中心で、それぞれ「コンピュータが壊されている」「コンピュータが壊れた」となります。このうち (2) はいわゆる「受動態表現」で「誰かがコンピュータを壊した」という想定があるものの、語り手の関心はコンピュータが壊されている、ということに置かれています。(3)はいわゆる「自動詞表現」で、「コンピュータが（使っていて自然に）壊れた」といった内容で、「誰かが壊した」という想定が特にありません。

## ● 関係代名詞の場合

同様に、関係代名詞を使って2文を1文に書き換えるという典型的なエクササイズにしても、以下のような説明をすることが必要です。

解説：英語では名詞が表す対象に対して「それがどういうものであるか」といった修飾情報を後から加えることが可能です。例えば、迷子の幼い女の子を探しているとしましょう。

Excuse me, I'm looking for a little girl. と述べ、その子の特徴として「長い髪をしていて、青いカバンを手に持っている」という情報を追加したい場合、どう表現すればいいでしょうか。関係代名詞節を使い以下のように表現することができます。

✓ I'm looking for a little girl **who** has long hair and is carrying a blue bag.

ここで who が関係代名詞で、そのはたらきは、「先行する名詞情報」（「先行詞」と呼ぶ）に情報を追加することで、対象を限定化する、あるいは対象にさらなる情報を加えるというものです。「関係代名詞」という用語から、who に他の代名詞のように a little girl を受けると同時に、who が導く節の内容（who has long hair and is carrying a blue bag）を a little girl と関係づけるはたらきがあることがわかります。

関係代名詞は、代名詞のように「先行詞を受けるとはたらき」＋「節内容を先行詞に関係づけるはたらき」を併せ持ちます。2つの文で表現すれば、I'm looking for a little girl. She has long hair and is carrying a blue bag. となります。この場合、「幼い女の子を探していること」そして「その子は長い髪をして、青いカバンを持っていること」が同等の重要な情報として示されています。一方、I'm looking for a little girl **who** has long hair and is carrying a blue bag. といえば、「幼い女の子を探している」ということに情報の力点が置かれており、who has long hair and is carrying a blue bag はあくまでも a little girl を修飾する内容になっています。

このように安易な置き換えではなく、それぞれの表現のもつ特性を説明することが大事であるということです。

## 原則 2 : 「間違っただ」理解の再生産は断ち切る

学校英文法の定番というものがあわけではありませぬ。言語学においでも、文法をどう捉え、表象するかについて1つの「解」があわけではありませぬ。しかし、学校で教師が理解している英文法は、基本的に長きに亘って再生産されてきたものですね。その再生産のプロセスの中で、例えば、5文型という考えが生き残り、「数えられる名詞と数えられない名詞」、「間接目的語と直接目的語」といった概念が継承されてきたのですね。問題は、この再生産過程において、「間違っただ」情報も自明なこととして再生産されてしまっているということですね。ここでいう「間違っただ」とは、「表現英文法上、有益な情報を与えない」という意味合いに理解しておいてください。

5文型の問題点は別の論文 (PLES Report No.50) で詳細に述べました。「数えられる名詞」と「数えられない名詞」という用語がありますが、これは誤解の元ですね。なぜなら、例えば、PIANO は数えられるのか数えられないのかといえは、a piano は数えられる対象を指すが、piano は数えられない対象を指すからですね。「ピアノを買う」という場合は buy a piano ですね、「ピアノ科を専攻する」は major in piano となります。上述した通り、ニワトリが産み落とした卵は an egg ですね、ネクタイについた卵は egg ですね。つまり、どういふ対象を指すかによって a piano か piano、an egg と egg の選択が決まるということですね。

### ● will の指導

例えば、will を指導する際に、「未来を表現するのに使う」「will の用法には単純未来と意思未来がある」といった説明のしかたをします。たしかに、will は未来のことを表現する際に用いられます。しかし、この説明では2つのことが欠けています。そのひとつは、will は現在のことも表現するということですね。Where is our manager?と聞かれて、I don't know, but she'll be in her office. と答える場合がそうですね。目の前の電話がなって、I'll get it. (僕がとるよ) の場合も、現在のことと理解して差し支えないでしょう。

もうひとつの欠けは、「未来とくれば will」といった理解に導いてしまうという問題と関係しています。未来は、want to、intend to、be going to、be scheduled to、be planning to などを使っても表現することができ、will はその中の1つでしかありません。このことに関連しますが、will は can, may, must, shall と同列で扱う「法助動詞」ですね、生徒の意識では、will do は、過去形や現在形と同列で扱う「未来形」だと考えている人がいます。

will の用法にも問題があります。よく辞書や参考に、「単純未来」と「意思未来」という用法の違いが説明されています。しかし、「単純未来」とは何かということを改めて考えてみてください。意味がわかりますか？筆者にもよくわかりません。「単純な未来とはどういう未来なんだろう」と生徒が疑問に思ってもおかしくありません。今日が土曜日だとして「明日は日曜日だ」は単純未来の事柄でしょうか。しかし、英語では、Tomorrow is Sunday.であって、Tomorrow will be Sunday.とはまず言いません。買い物をしてレジで How much do I owe you? (いくらになりますか) と尋ね、相手が That'll be 30 dollars, sir. と答えました。この will は単純未来の用法でしょうか。

「意思未来」という言い方にも問題があります。「未来に向けての意思を表す」ということですが、まず表現としてわかりにくいですね。「意思をもった未来」「意思をあらわす未来」という解釈ができるからです。そもそも、意思の表明は未来の事柄だけではありません。

そのため、will を適切に理解するには、「will は現在の話し手の意思か推量を表す」と生徒に説明すべきです。つまり、will はほかの法助動詞と同様に、話し手の態度を表現する手段なのです。話し手は「今、ここ」において発話します。そこで、「現在の話し手の意思か推量」となるのです。上の電話の例の I'll get it. はまさに、「今、話し手の意思」を表しているものです。話し手の意思は直接表現することができます。二人称である相手の場合は、意思を問うことができます。しかし、3人称の場合は、意思を推量するしかありません。

結婚のプロポーズのシーンを想像してください。この場面で Will you marry me? と言えば、今、「ここで結婚してくれるかどうか」の相手の意思を問うています。そして、相手が、Yes, I will. と答えれば、この will はこのプロポーズの時点での相手の意思表示であり、文脈的に「求婚」という場面であることから、この will は「結婚する約束」としての効力を持つこととなります。ところが、Will she marry him? の場合はどうでしょうか。第三者の彼女の意思は推量するしかありません。「彼女は彼と結婚する（意思を持っている）だろうか」という意味合いです。そして、相手が、Yeah, she will. と応じたとすれば、これも「彼女は結婚する（意思をもっている）だろう」と（意思の）推量となります。It will rain tomorrow. のような場合は、意思は背後に退き、推量の意味合いが強くなります。

will は「現在の話し手の意思あるいは推量を表す」という捉え方をすることで、Where is our manager? に対して、She'll be in the office. が現在の推量の事例だとわかります。同様に、「おいくらですか」という問いに That'll be 30 dollars. は「30 ドルになります」ということですが、That's 30 dollars. と言いきらないで、will の推量を加えることで、幾分丁寧な表現になるということもわかります。もちろん、明日は日曜日だという場面で Tomorrow is Sunday. と表現する事例にしても、「ここでは推量の余地がないから、will を使わない」と説明をす

れば、すんなり理解することができるでしょう。

上では will を事例として取り上げましたが、can の理解、冠詞の理解、前置詞の理解など「間違った理解」が再生産されている場合が少なくありません。適切な文法指導を行うには、この「間違い」の再生産を断ち切る必要があります。

### 原則3：表現と結びつかない文法はNG

繰り返しているように、文法のない言語はありません。ある言語を話す人は、必ず、その言語の文法力を身につけています。言い換えれば、どの文にも文法の血が流れているということです。これが文法の実相であるにもかかわらず、英文法を勉強しても英語が使えるようにならないということをよく耳にします。英文法と英語が使えることとは別物と考える人もいます。これはおかしい話です。むしろ、文法がわからなければ英語は使えないというのが筋です。

新学習指導要領（2022年から施行）には、文法に関して以下の記述がみられます。

「文法事項の指導に当たっては、文法はコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、過度に文法的な正しさのみを強調したり、用語や用法の区別などの指導が中心となったりしないよう配慮し、使用する場面や伝えようとする内容と関連付けて整理するなど、実際のコミュニケーションにおいて活用できるように、効果的な指導を工夫すること。」

これは現行の学習指導要領の内容を踏襲したものになっていますが、まさに正鵠を射た表現です。表現のための文法であって、文法のための文法ではだめだということです。

表現と結びつかない文法指導はNGです。どういう指導法が表現と結びつかないのか。例えば、以下の説明を見てみてください。

「今日から不定詞をとりあげます。不定詞とは to do の形のをいい、I want to go abroad someday. の to go がそれです。日本語では「いつか海外にいきたい」という意味です。不定詞には、いくつかの用法があります。名詞的用法、形容詞的用法、副詞的用法が不定詞の3大用法です。今日、注目したいのは名詞的用法です…」

こういった文法指導は全国のそこかしこで行われているのではないかと思います。この手の指導では「不定詞」という用語をいきなり使い、用法の説明に入るところが特徴です。不定詞という文法項目を説明することに主眼が置かれています。その結果、生徒が不定詞を理解したかどうかをチェックするのに、「次の文の下線部は不定詞のどの用法にあたるか」「次の日本語を、不定詞を使って英語にしてください」といったミニテストを行います。多くの場合、残念ながら不定詞の例文に「切れ味」がありません。

「切れ味」といえば、表現と結びつく文法のための用例として、以下のようなものを示すことで生徒の関心は高まるはずです。



Pull to open.は「開けるにはここを引いてください」ということだし、worst food to eat for breakfast は「朝食で食べる最悪の食べ物」、I love to be alone.は「一人でいるのが大好きだ」という意味ですが、生きた用例にふれた後で、to の用法に注視させるのがいいでしょう。

## ● 教師が英文法の本質を理解する

英文法は所与ではなく、自分の中に構築していくものという立場をとり、教師自らが英文法の本質をよりよく理解する努力が必要です。そして、自分が理解した英文法を生徒のレベルに合わせて脚本化すること、これが英語教育の課題です。脚本は教案でもあります。その際に、「生きた英語の中の文法」ということを絶対重視することです。例えば高校生であれば、以下のような英文を示し to do の使い方に注目させるのもいいでしょう。

For everywhere we look, there is work to be done. The state of the economy calls for action, bold and swift, and we will act - not only to create new jobs, but to lay a new foundation for growth. We will build the roads and bridges, the electric grids and digital lines that feed our commerce and bind us together. We will restore science to its rightful place, and wield technology's wonders to raise health care's quality and lower its cost. We will harness the sun and the winds and the soil to fuel our cars and run our factories. And we will transform our

schools and colleges and universities to meet the demands of a new age. All this we can do. And all this we will do.

(というのは、どこを向いても為すべき課題があるからです。経済情勢は大胆で速やかな行動を求めており、われわれは、新しい仕事を作り出すだけでなく、成長に向けての新しい基盤を築くための行動をするつもりです。われわれは、道路や橋を作り、そしてわが国の商業を潤わせ、われわれを団結させる配電網やデジタル網を敷きます。われわれは科学を本来あるべき場所に戻し、技術的な力を駆使しながら医療の質をさらに高め、コストを減らします。われわれは、車の燃料をつくり、工場を動かすために、太陽や風や土壌を利用します。そしてわれわれは、新しい時代の要請に合うように、小中高の学校や高等教育機関のありようを変えていきます。このすべては、われわれにできることであり、このすべてをわれわれはするつもりであります) Barack Obama 大統領就任演説 2009

これは、前米国大統領のオバマ氏の伝説的な就任演説からの引用です。ここでは、We will do such and such to do something.の表現型が反復されています。オバマ大統領の決意あるいは公約として、We will do such and such を表明し、その目的を to do something で表しているのです。これはまさに「生きた英語の中の文法」です。

文法指導で押さえておくことは、文法は文を分解するためではなく、文を紡ぎ出すためにあるということです。文法を知ることによって表現の幅が広がってくるということを生徒に実感させることです。言い換えれば、文法用語ではなく、文法の表現型を自在に使えるように指導することです。ここでいう表現型の例では、上の We will do such and such to do something. のようなものですが、不定詞を例にすれば、ほかにも I'm planning to do, I'm scheduled to do, I want to do など多数の表現型があります。要は to do という to 不定詞だけに注目するのではなく、to do が使われる表現の型に注目するということです。そうすることで、表現のための文法指導が可能になるはずです。

文法力を養成するうえで不可欠なのは、生徒が文法項目を丸覚えでなく、納得して理解することです。「不定詞には名詞的用法、形容詞的用法、副詞的用法がある」と理解するより、「前置詞の to がある場所や建物などに向き合うという意味であるように、to do は、ある行為に向き合うという意味合いがあり、基本的に『これからする何か (未来志向的な意味)』を表す」と理解するほうが、意味ある理解ということからいえば有益です。I want to clean my room. の to clean my room (名詞的用法) は「これからすること」であることは明らかであり、I have a lot of housework to do today. の to do today (形容詞的用法) も「これからする (家事)」ということです。そして、I want to clean my room to please my mother. の to please my mother (副詞的用法) は「お母さんを喜ばせるために」という意味合いですが、目的も「これからする何か」ということで共通しています。つまり、to do は名詞的に使っ

たり、形容詞的に使ったり、副詞的に使ったりしますが、共通項は同じということです。

ちなみに、I'm pleased to meet you here.は「ここでお会いできて光栄です」という意味なので、to meet you here は「これからする何か」と解釈するとうまくいきません。しかし、「行為と向き合う」ということにおいては共通しており、「ここであなたとお会いするという行為に向き合って、嬉しいという感情を表現している」と解釈することができます。

われわれは、もっとも有効な文法指導は、「話すことで文法力を鍛える」ということであると考えています。指導の観点からいえば、無理なく自然な形で文法が表現活動の中に含まれるようにするということです。

## ● 口頭で文法力を鍛える

上では、表現のための英文法を構想するにあたり、モノについて語る名詞の文法、コトについて語る動詞の文法、状況について語る副詞の文法の3つを提案しました。そして、それぞれの文法が関与する名詞チャンク、動詞チャンク、副詞チャンクを表現単位とみなしました。表現は以下のように、時間軸に沿ってチャンクを連鎖化することで行われます。この連鎖化のことをチャンキングと呼びます。



例えば、I don't know why she believed that Bill had told her. (ビルが彼女に言ったことをどうして彼女が信じたかは僕にはわからない) という文は、以下の3つのチャンクにより作られています。

[I don't know]

[why she believed]

[that Bill had told her]

チャンキングのプロセスに注目した文法指導のことを、Grammar in Chunking と呼びます。以下では、Grammar in Chunking に基づく、文法指導について、事例をみていきます。

## ● Grammar in Chunking の事例

われわれが提唱するチャンキング学習法とは、動詞コロケーションのリストをチャンクの最小単位として、それに別のチャンクを加えていくという方法です。その際の鍵となるのは「選択可能性」ということです。以下は、筆者らが中学2年生を対象に「to不定詞」の使い方について指導する際に用いた素材です。まず、to不定詞のtoに注目させ、次のような板書をします。なお、)(は何かと向き合う関係を示す記号です。

前置詞 to と不定詞 to は違うが共通点もある

前置詞 to : 空間的に物や場所に向き合う

to

I went            ) (the convenience store.

不定詞 to : 時間的に行為に向き合う

to

I want            ) (go to the convenience store.

「時間的に行為(すること)と向き合う」ということは、「これからする何か」だと説明し、to go to Hawaii だと「これからハワイに行くこと」、to study hard だと「頑張って勉強すること」というチャンクを確認させます。そして、次のような気持ちを表すチャンクとこれから行うことのチャンクをリストで示し、生徒に自由に組み合わせるように求めます。

### 君の気持ち

I really want    ぜひ…したい

I hate…        絶対にしたくない

I refuse        …するのを拒否する

I'm planning    …する計画だ

I've decided    … ~することに決めている

### これから行うこと

to go to Hawaii

to learn real English

to study very hard

to clean my room

to buy a new smartphone

to make a lot of money

to work part time

これは、最も単純な2つのチャンクを繋ぐやり方ですが、ここでのポイントは、I've decided とか to make a lot of money をチャンク（意味のかたまり）として提示することです（細かい文法的な解析は必要ありません）。What do you really want to do? であるとか What are you planning to do? という教師の質問に間髪入れず、応答できるようになることが目標です。

T: What do you really want to do?

S: I really want to go to Hawaii.

この目標をクリアしたら、次に、to do のもう一つの働きとして「～するために、～することを目的に」を次のような形で示します。できれば to go to Hawaii、to try surfing、to learn real English などのイラストや写真があるといいでしょう。

(I really want) to go to Hawaii →→ to try surfing.



I really want to go to Hawaii と生徒が言えば、Why? とか「なんで?」と質問し、to try surfing とか to learn real English というチャンクを引き出します。

ここで、教師は、「to do は『これからする何か』を表すよね。「～するために」という目的も『これからする何か』であることには違いないね」「to do の形はスゴク使い道があるね」などとコメントします。その上で、以下のような選択詞を与えます。

I really want to work part time ….

I'm planning to go to Hawaii ….

I've decided to study very hard ….

I really have to clean my room ….

to enter a good university

to buy a new smartphone

to please my mother

to have a relaxing time

どういう組み合わせをするかは、生徒の自由意思にまかせます。ここでも、選択肢が与えられているということがポイントです。I really want to work part time to enter a good university. というチャンキングをした生徒には、「アルバイトすると大学のAO入試なんかで評価され

るかなあ？」などとコメントするといいいでしょう。選択肢があることで、活動は authentic になり、生徒も personal な自分事として表現することができるようになるでしょう。この手のエクササイズでは、生徒側の認知的負荷はできるだけ下げる工夫が必要です。

チャンキング的表現を繰り返すことで、文法力を高めることができます。さらに次のような情報をチャンクとして足す作業に展開してもよいでしょう。

#### チャンク X

this summer この夏に

before I graduate from high school 高校を卒業するまでに

sometime in the future 将来のいつか

right now 今すぐに

later 後で

すると、[I really want] [to work part time] [this summer] [to go to Hawaii]. のような文を作り出すことができます。このように、チャンクを連鎖化させることで、次のような表現の流れを型として生徒は身に付けることになるでしょう。

チャンク A + チャンク B + チャンク X + チャンク C

I really want to work part time this summer to go to Hawaii

チャンク A とチャンク B を合体させてチャンク A B にする練習するのもよいでしょう。すると、生徒は、I really want to work part time をひとつのチャンクとして表現することができるようになります。

これがチャンキング学習法の方法です。まず、自分のことを語るといことで主語は I で始めるのがよいと思います。もちろん、主語を he とか she に変えて表現してもよいでしょう。その場合、自分のことではないので、確信の度合いを表す表現をチャンクとして示すことができます。

{It seems..., I think..., I'm not sure, but..., I'm not sure, but it looks like..., definitely...}

すると、次のような表現を作り出すことができます。

- ✓ It seems /she's planning to go to Hawaii/ this summer/ to have a relaxing time.
- ✓ I'm not sure, but it looks like/ he has decided to study very hard/ to enter a good university.

未来表現の場合には、{I will do, I will be doing, I'm going to do, I'm planning to do, I'm scheduled to do, I intend to do, I'm doing}などをチャンクとして示し、それぞれの表現の特性を簡単に説明しておきます。そして、動詞コロケーションや副詞情報などの表現リストを示すことで表現の瞬発力を高めるためのエクササイズを行う態勢が整うのです。

## ● 比較級の指導もチャンキングを使って

ここまで述べてきた GIC(Grammar in Chunking)の方法はいろいろな文法項目に適用することができます。例えば、比較構文の指導を具体的に考えてみましょう。まず、8つの教科の難易度について比べる課題を与えます。教科のボックスにチェックを入れて、各自で難しいと思う教科を3つ、簡単と思う教科を3つ選びます。「むずかしい」は difficult、「簡単」は easy を基本としますが、同じ形容詞では飽きがくるので difficult については tough (きつい)、easy については my favorite (自分の得意科目) をオプションとして与えます。For me A is difficult, but (I think) B is easy の形を使って3通りの表現を作ります(ノートに書く)。

{math, science, English, music, history, P.E., Japanese, biology}

### Chunk 1

For me,

- math is difficult (tough)
- science is difficult(tough),
- English is difficult(tough),
- music is difficult(tough)
- history is difficult(tough)
- P.E. is difficult(tough)
- Japanese is difficult(tough)
- biology is difficult(tough)

### Chunk 2

but (I think)

- history is easy (my favorite)
- P.E. is easy (my favorite)
- Japanese is easy(my favorite)
- biology is easy(my favorite)
- math is easy(my favorite)
- science is easy(my favorite)
- English is easy(my favorite)
- music is easy(my favorite)

生徒には自分が作った文章を各自が3回音読させます。教師は、5名の生徒を一人一人当てて、発表を行わせます。Chunk 2 ののはじまりは but のみでもよいし、but I think でもよいことを伝えます。例えば、生徒 A は次のように発表するでしょう。

生徒 A

- ✓ For me, math is very tough, but I think history is easy.

- ✓ For me, biology is difficult, but English is my favorite.
- ✓ For me, science is difficult, but P.E. is easy.

For me を加えることで、自分事としてこの課題を捉えやすくなります。

次に、比較級の構文 **more ... than** を取り上げます。通常は、**as...as** の形から入り、比較級、最上級と進みます。しかし、ここでは比較級をまずとりあげます。同等比較 (**as ... as**) より、日常的によく使われ、しかも実感としても「A は B より～だ」のほうが生徒に分かりやすいためです。教師は、使わせたい構文を提示します。

### -er/more ... than ...

easy は **easier than** になり、difficult は **more difficult than** になること伝え、以下のような事例を示します。

- ✓ I think /math is more difficult / than science.
- ✓ For me, /English is easier / than Japanese.

これに倣って、例えば **For me, math is tough, but I think history is easy.** と回答した生徒には、以下のように表現するように促します。

- ✓ For me, math is tough, but I think history is easy. I mean, personally, math is more difficult than history.

他の生徒にも、教科の難易度について自分が評価した内容に基づいて、ここでの例のような文を作らせます。

この段階で、教科の難易度比較を離れ、3つの形容詞対を強弱の尺度を付けて紹介します。何かを比較する際の観点を提供するためです。

strong 1-----2-----3-----4-----5-----6-----7 weak

noisy 1-----2-----3-----4-----5-----6-----7 quiet

fast 1-----2-----3-----4-----5-----6-----7 slow

比較級表現のために、stronger than, weaker than, noisier than, more quiet than, faster than, slower than の口慣らしを十分にします。その意味も確認しておきます。そのうえで、以下を比較の対象として示します。

my mother, my father, my sister, my brother, the tiger, the cheetah, the elephant, my cat

生徒に3つの比較の観点 (strong, fast, noisy など) を使って、それぞれの文を作成させます。全員が作成したところで、各自の作品を発表する。例えば生徒 A が次の3文を作成したとします。

- ✓ My mother is stronger than my father.
- ✓ My sister is noisier than the elephant.
- ✓ The tiger is faster than the cheetah.

次に生徒に発表をしてもらいますが、その際に慣用チャンク表現として I'm sure、I think、そして I don't know, but の3つを順番に使うよう指示します。

- ✓ I'm sure/ my mother is stronger than my father.
- ✓ I think/ my sister is noisier than the elephant.
- ✓ I don't know, but/ the tiger is faster than the cheetah.

音読する際に、I'm sure/ my mother is stronger/ than my father と3つのチャンクに切ってチャンク読みを行うよう指導します。ここでは、7～8名ぐらいの生徒に発表をさせます。同じことを全員にやると惰性で発表するようになるため、7～8名程度に限定するのが効果的でしょう。生徒が I'm sure our teacher is stronger … でポーズを入れて、他の生徒に残りを入れさせる方法もバリエーションとして取り入れてもいいでしょう。

このように、不定詞であれ比較表現であれ、表現活動の中で使うようにすること、そして用例はできるだけリアルなものを使うようにすることで、新しい文法の指導が可能になってきます。われわれは、文法項目の多く（関係代名詞、動名詞、仮定法、助動詞、時制など）がこういう Grammar in Chunking のやりかたで指導したり、学んだりすることができると思っています。

## ● おわりに

文法といえば、英語の文の構造を理解するためのもので、問題集などの練習を通してその仕組みを理解するという共通理解があるように思います。しかし、文法力は、自由に表現を作り出し、理解することができる力の主要素であり、それを鍛えるためには、発想の転換が必要です。本稿では、新しい文法の学びの方法として、チャンキング学習法を提案しました。この手法は、全国の高等学校のいくつかで教員向けワークショップを行い、そこで試していますが、参加した先生たちからは高い評価を得ています。チャンキング学習法で英文法の全体のどれぐらいがカバーできるかですが、ざっくりいえば 8 割程度の内容をカバーできるのではないかという感触をわれわれは得ています。